へ13
2378
175

遠13
2378
175

唐土廿四孝之内 江革之話

後漢の代に。江革字は次翁とのたまへり。年若くして父に放逐母と俱に住居するに。乱世にあれば母を資ふ術なく賊に逢ひ。母を負て逃げんとすれども。賊の手下となり。捕られゆくとなり。賊の手下に江革を切殺さんとせしに。江革涙を流して。母のあることを告げて。こひ願へば。賊なほ其孝心を感じ。財物を犯し奪ふことなかれと。下部として。而ふ事をつとめてゆるしたり。江革裸跣にして。貧く。究て貧く。足は素足にて。あるいは雇人となりて。母を食を備へ。あるいは母育されば。進退窮まりなく。自由なる事なり。母の紙のまりの人江革をして江巨孝と。漢人ほめたるとぞ。寒ふ孝八百善の源なれば。天感じて。仮て後に江革は。漢に仕官に上られ。雷名廿四孝の其ひとりに。世四孝の其ひとりに。

詩曰

負母逃老難　途賊犯頻
哀告俱獲免　傭力以供母

此ふ一個の孝子あり漢の江革れひとき行状さも優しく今ハ昔上毛野國赤城山の辺に長者何がしのこふ照松といるハ幼若にして父ふ亡きあし母徒乃たもふに家財をもとくく相順せ養育る母と乃て徳治彼ふ情と蒙るあれハ是ふ恵みを受るありて治徳きこまりなくくさうちの子孫万苦いまくくしてを賊の業をもくくもせまじ弟を慶なの如くして朝ふは墨絵くくき山野よりそなはは露ふ涙して敬ふ仕ふ仕て恵ふ仕まつる

世良田氏之娘花月

赤城の長男照松

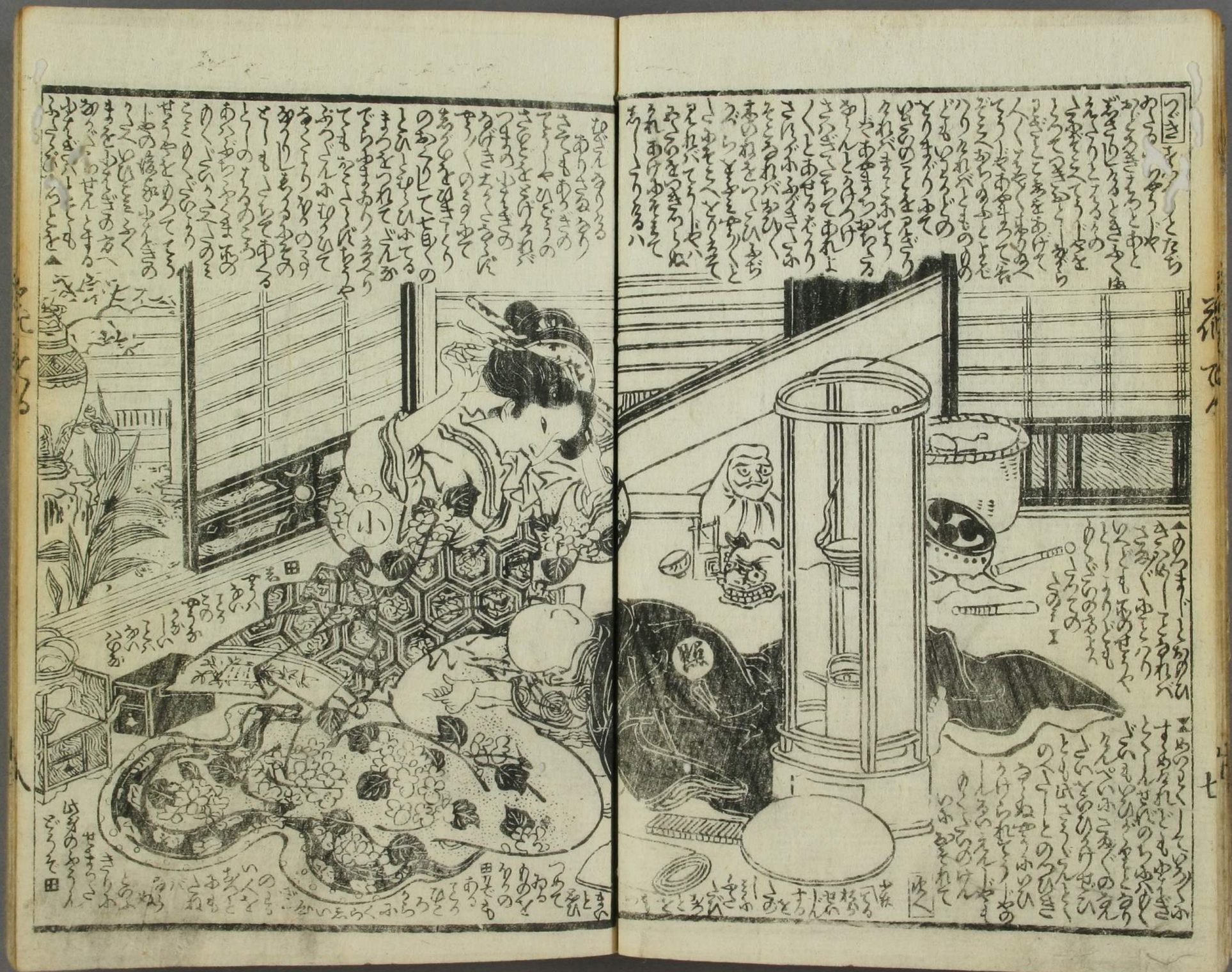
身あハ
無服ハ
寒き夏の怒
を慰ぜ貴ふ
天の照賢ふ
あひ孝子の誉れ
を
父の
忌
を報して英名ぞ
ひろしたる
世の
赤土なり

以泉按下人一回雖
振威雷
鳥高飛隨獵夷
躍淵死天禍侄
福善榮枯交
自来
浪士泡沸復馬
山王堂之五郎左衛門
赤城長之妻小秋

上州赤城助太刀形代之図
一 上野国赤城山の麓に赤城の助たちといふものあり毎年正月
あらそひくる下総の赤城の神と榛名の神と中に
ありて 疫病をはらひ給ふ
赤城の氏子の村々にて
助太刀と号して
▲杉の葉をもつて高さ二丈
以上の法師武者のかたちをつくり武者太刀障子
とあり杉の葉にてこしらへたるもの也 顔は色どり紙にて
張るも恐しきかたちにして 腰を刺しておし 信濃力を
まげまし 村の出口に是をおく 爰にその
中たとへを見て恐怖し 往れ正月を来るものの
きつねありくのふまし 榛名山の氏子の方にもなきごとく
らしく是をその村の助太刀といひて正月より翌年の
正月まで其所にさらし 杉の葉にて
▼ 挿したるは いみくさの 葉くありて
こうらいの くさを たとへて
一の 太刀の 華 とのふ 候

巻之二

泡

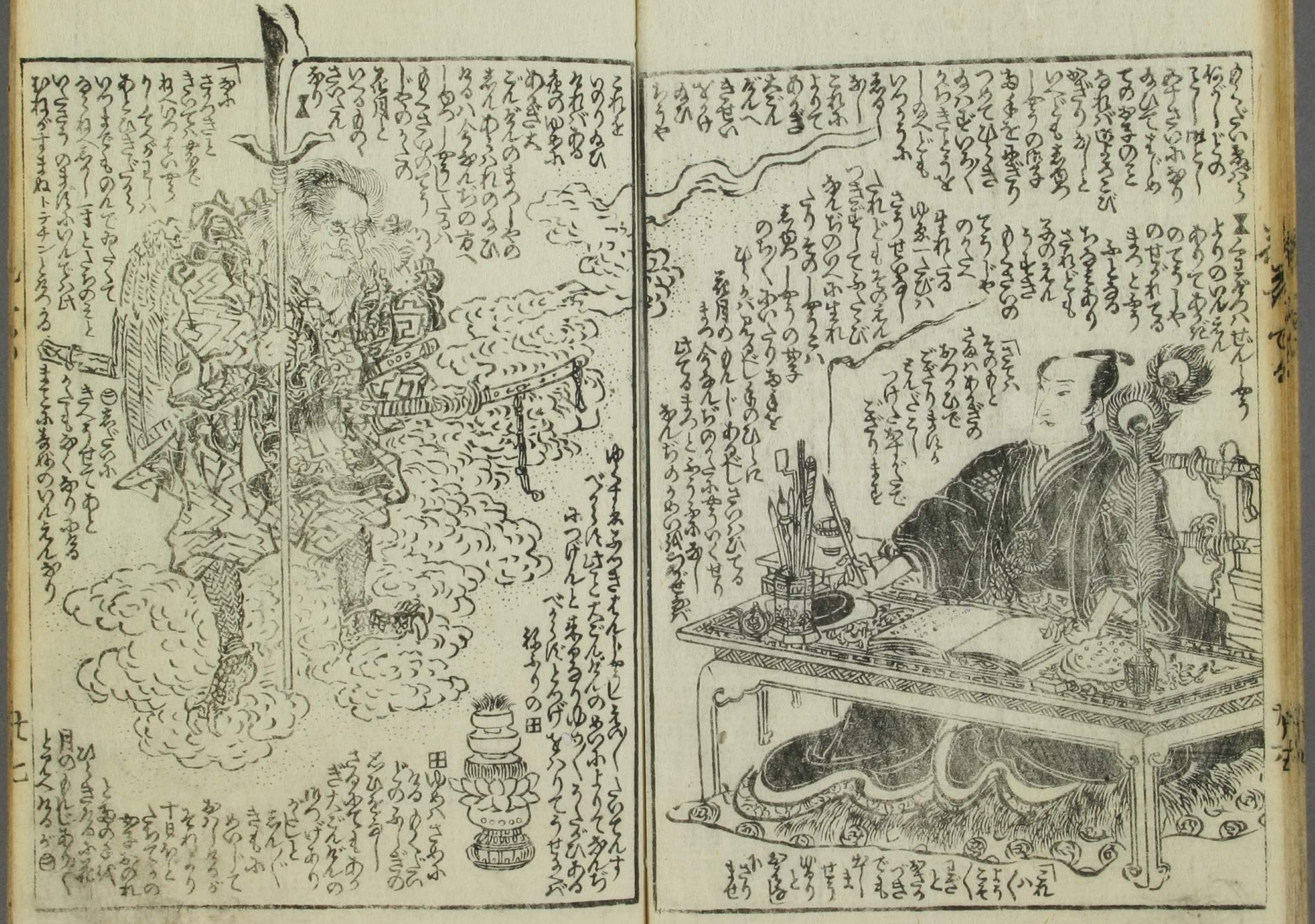


泡

「イヤこそぞうめら
どうやらこそ
くさんけのぜこを
ぬもこそそ。

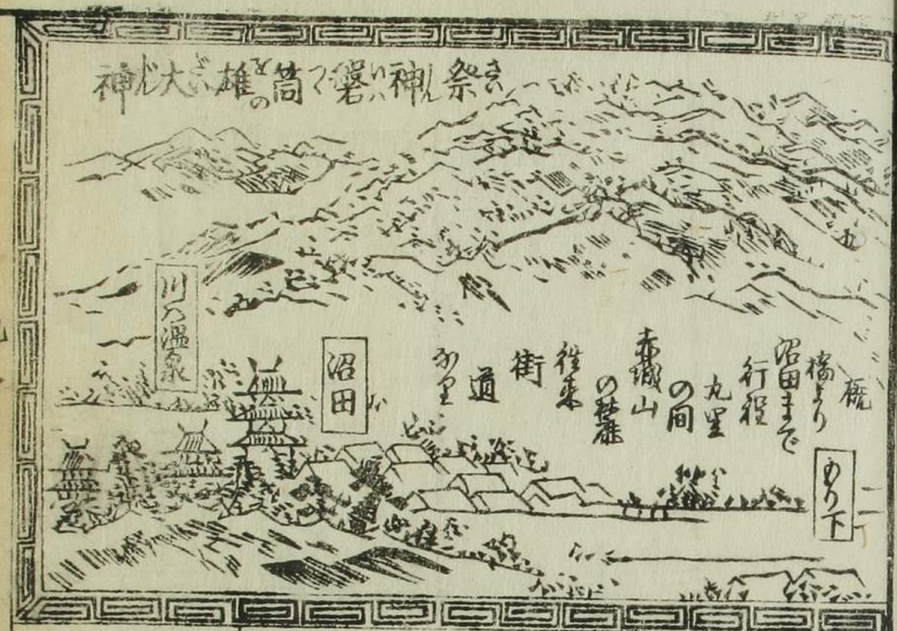
巻之三
潤王補元丹
酢屋

照
花



序

僕去年伊香保の上州伊香保の温泉へ行かんとて沼田へ出て厩橋へ出る道中の茶屋の老婆ふさのことあり此の中国花月塚の素由世良田太郎の中国の問ふあり[illegible]



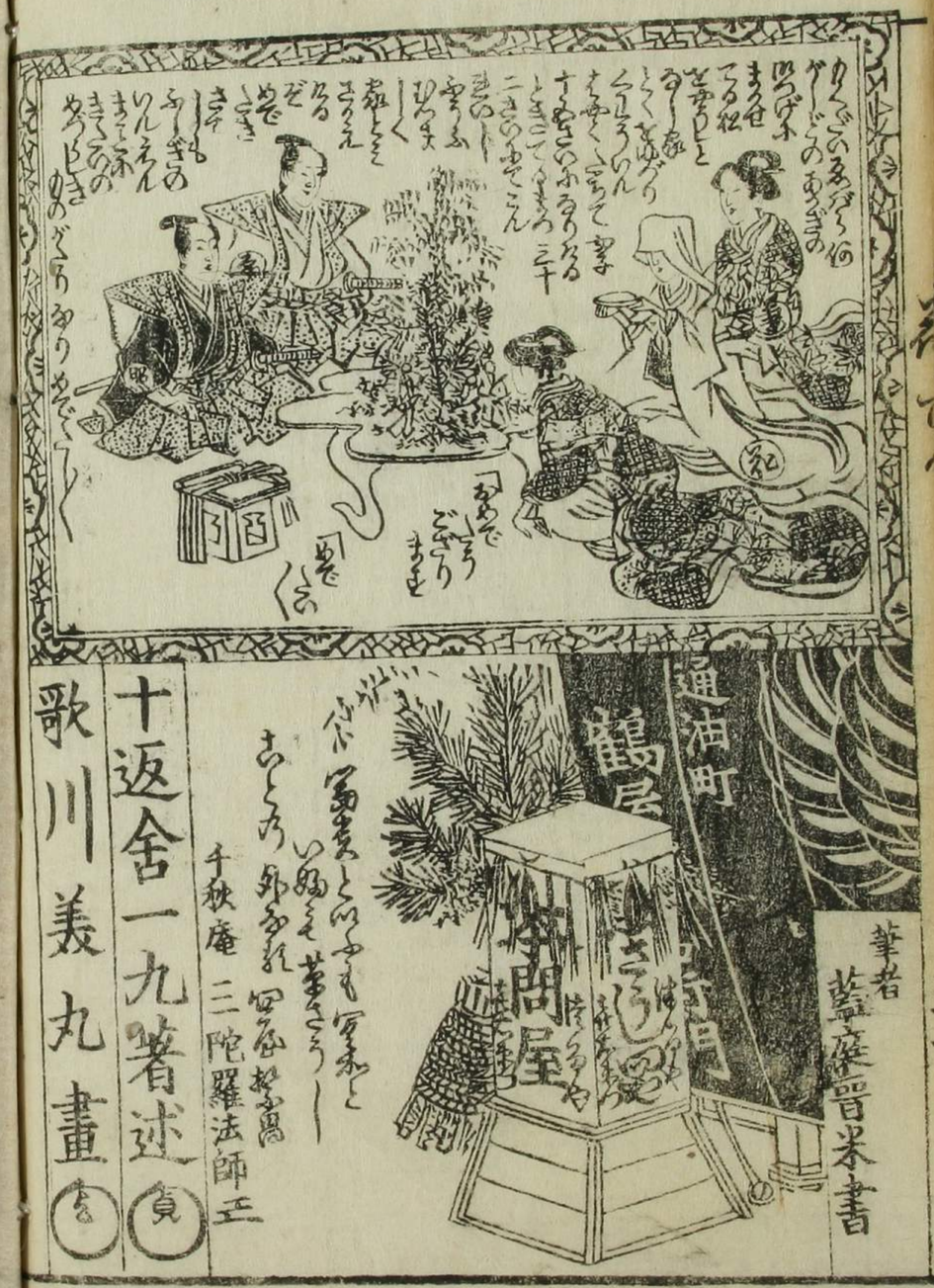
その例かくのごとし

水澤観音霊験物語 来子春岳編 全部六巻

高崎の将士芝田の[illegible]成家[illegible]の孫成基の[illegible]源室上人の弟子となりて出家[illegible]成家の切状帯有のるゆりて出家[illegible]

上州伊香保之記 中本 全二冊

平去年この温泉へいより本書[illegible]



十返舍一九著述

歌川義丸畫

千秋庵三陀羅法師正